作文技術教育の必要性、さらに英語教育との関連

都市基盤工学科教授
皆川　勝

本年報への寄稿文「都市基盤工学科カリキュラム改定」において、技術作文という科目を新設するに至った経緯とその主な教育内容を概説した。本稿では、技術文章を書くということについて、科目担当者として考えていることを述べ、ご批判を仰ぎたい。

１．本学科の学生

本学の学生は、1 年生から３年生までの授業で、「なんと文章が書けないことか」と先生方に怒られつづけてきた。しかし、どうすれば良いかという方向性を必ずしも明確に示されてこなかった。そして、4 年生の卒論で数十ページの論文をはじめて執筆する際に、卒論の指導教授にその日本語と取っ組み合わせることになる。ところが、「この文章のここを、こう直せばわかりやすくなるぞ」という具体的な指摘を受けるが、なぜわかりやすくなるのかについての論理的な説明がないために、効果的な文章力の向上につながらない。この結果、3 年生や 4 年生までに社会人として十分な文章力を身につけることができず、就職試験では「まともな文章も書けないのか」と言われて不合格となる。「武蔵工大ではどういう教育をしているのか」と大学に対しては不信感をもたれる。本学の入学生のなかで学習到達度がきわだって低い都市基盤工学科の学生にこの傾向が強い。本学科の授業科目として技術作文を開設する動機がここにある。

２．私の場合

まず、文章を書くということに関して、私がどのようなプロセスを経てきたのかを思い出してみる。小学校のときにはごくたまに「感動的な良い作文ですね」と先生に褒められたこともあるが、多くの場合には「自分はとても文章を書くことを主要な仕事とすることはできないなあ」ということを確認するだけだったような気がする。そのような私が、大学に入ってどうなったかといえば、まったく当然と言えば当然のごとく、卒業論文の指導教授の先生にレポートを提出すると真っ赤に直された。直す以前の段階と突っ返されたことも数え切れないほどあった。「日本語がまともに書けない私は日本人として失格なのかなあ」と思うこともあった。そして、教員となり、中途半端な文章を書きつづけ、怒られ続け、47 歳のいまになっても、ここに書いている程度の文章しか書けない。ここで、何が悪かったのかを分析し、本大学に入学してくるかわいい子供たちには、自分の歩んだ道を歩ませないようにしなければならないと思った。

３．作文は本当に難しい

大学に入るまでに、日本語で文章を書く訓練を受けるような教育システムが確立していないと思う。「よく誤解されている作文論」として、「話すように書けばよい」という考

え方がまったく誤っていると本多勝一[1]は指摘している。また、清水幾太郎[2]は「日本語で文章を書くという時は、この日本語への慣れを捨てなければいけない」として、日本語に達者のつもりの日本人が日本語で文章を書くことが、いかに困難な作業であるかを述べている。日本人は生まれてからすぐに聞くことを始め、3 歳ころまでには、数語の単語を組み合わせて話すようになる。その時点ではまだ読み書きはできないが、話す際の文法駆使能力は大人と同程度だそうだ。「読み書きそろばん」と言われるように、会話に比べて読み書きにはより高等の能力を要する。それは文字を扱わなければならないことによる。では、読むことと書くことについての違いは何であろうか。それは前者が他の人の創作物を理解するの行為であるのに対して、後者は創作活動そのものである点にある。これらのことから、聞くこと・話すこと・読むことと比べて、書くことがはるかに困難で創造性を必要とする作業であることがわかる。「あなたは日本語で文章を書けますか」と質問されれば、多くの日本人は怒るのではないだろうか。だが、「あなたは正しい文章を日本語で書けますか？」と質問されて、「もちろんです」と自信を持って応えることができるだろうか。

４．実用的な文章を書く技術の必要性

話すときには必要のない多くの技術を、書くときには使わなければならない。文法、句読点、漢字とカナの使い分け、修飾の順序、「」書きなどである。会話をする際には表情・身振り手振り・聞きなおしなどの手段を併用することが可能なので、文章としてはいい加減なものでも、話しことばとしての問題は少ない場合が多い。しかし、書く時にはそのような補助的手段を使えないので、それだけ正確に読み手に伝わる文章を書かなければならない。伝える内容は、感動、感情、意見、事実、感想など多岐にわたり、伝えるべき内容によって書き方は異なってくる。文章を大きく二分類すると、感動や感情を伝える小説などの文章と、事実的なものを伝える実用的文章に分類できるが、技術者として要求されるのは「事実的なあるいは実用的な文章」を書く能力である。

ところが、学校で作文能力というと、まずは漢字暗記による語彙力、文法的に正しい文を書ける能力、そして感動を伝える能力や心情を生き生きと表現する能力と続いてゆく。ところが、漢字を用いつつ文法的に正しい文が書けても、それが正確なわかりやすい文とはならない場合は多い。例えば、「渡辺が皆川が推薦した本を持っている」は「皆川が推薦した本を渡辺が持っている」とした方がわかりやすい等である。ところが、学校ではそのような勉強はせずに、作文や感想文を書かせることで、感動を伝える能力や心情を生き生きと表現する能力を求める傾向が強い。まるで全員に小説家になれとでも言うように。正確でわかりやすい文章を書く能力の開発が抜け落ちているのである。そこで、正確な文章をたくさん読むことや、文章を書く経験の豊富な先輩の指導を受けるなど、主として個人の努力によって、私たちは文章を書く能力を開発してきた。そして、人間としての成長の度合いによって、正確にわかりやすい文章を書く能力は徐々に向上する。しかし、必ず使わなければならない技術がある以上、それを学ぶことで、正確でわかりやすい文章を書く能力をより効率的に身につけることは可能である。

５．大学で作文技術の教育をする必要性

次に、小学校から大学までのどのレベルの教育機関がその役割を担うべきかを考える。リテラシー（読み書き）教育であるから中等教育機関で担うべきで、大学に入ってからやるべき教育ではないという見方があり得る。しかし、ここで言っている読み書きの「書き」の部分が指すのは、文字どおり日本語を書くことができるということだけである。ところが、この意味ではほとんどの成人した日本人は文章を書くことができる。しかし、それは日本語で使う文字を書けるということに過ぎない。技術者あるいは教養人として社会で貢献するためには、最低条件として事実を正確にわかりやすく伝える文章を書けなければならない。その教育を高校までに終わらせるためには大学の入学試験でそのような能力を評価することが手っ取り早いが、本学でそれを入試科目として追加することは困難だろう。そうなると、残された機会は入学後ということになる。なお、入試科目として作文を課したり、推薦入試などで作文を提出させているが、どのように作文技術を評価しているかについては、調査する価値があると思う。

６．教科書

わかりやすく正確な文章を書くということに関して私が出会った最初の本は、本多勝一著「日本語の作文技術」（朝日文庫）であった。そこでは、「事実的あるいは実用的な文章のための作文技術を考えるにさいして、目的はただひとつ、読む側にとってわかりやすい文章を書くこと、これだけである」と書かれている。そして、「長い修飾語は先に、短い修飾語は後に」など、わかりやすい文章とするために重要な原則がまとめられ、実例で詳細に分析されている。

次に出会った本は、木下是雄著「理科系の作文技術」（中公新書）であった。ここでは、「米国の大学の一般教育課程では修辞学（Rhetoric）または英語作文(English composition)が必修であり、言語によって情報や意見を明快に、効果的に、表現・伝達するための方法論」の修得が義務つけられていることが紹介され、わが国においては、そのような教育は皆無でありこの分野の参考書はないといっていい状態ゆえにこの本を執筆したと著者は述べている。

これらの二冊の本で、わかりやすい文を書き、それを文章としてわかりやすく構成することの基本を学ぶことができると考え、教科書として選んだ。具体の内容を教科書の目次によって示す。

木下是雄著「理科系の作文技術」：

準備作業（立案）/文書の組立て/パラグラフ/文の構造と流れ/はっきり言い切る姿勢/事実と意見/その他

本多勝一著「日本語の作文技術」：

修飾する側とされる側/修飾の順序/句読点の打ち方/漢字とカナの心理/助詞の使い方/段落/その他

授業の形式としては、基本的な事項を講義して演習によりそれを確認させたあと、グループにわかれて特定テーマで作文し、それを相互に批判しあう形式を考えている。このような授業は少人数で実施することが望ましい。現実に何人の学生が履修してくるか、そのうちのどのくらいの割合の学生が真剣に喰らいついてくるかによって、柔軟に対応してゆきたいと考えている。

７．英語教育との関係

現在、工学部及び工学研究科では英語能力向上の話題でもちきりの感がある。それと作文技術の関係について触れてみたい。先に述べたように、話すこととわかりやすい文章を書くことは、本質的に異なった作業であり、後者には高度の技術が要求される。このことは英語についてもまったく同様にいえると思う。仮に、日本語でわかりやすい文章を書く技術を持たないが、英語の会話が大変上手な人がいたとしよう。その人は、英語でわかりやすい文章を書くことができるだろうか？答えは NO だろう。日本語ですらわかりやすい文章が書けない人が英語で書けるとは思えない。技術作文を正確にわかりやすく書く能力を高める教育は、英語で書く能力を間接的に高める効果をもつと思う。

８．おわりに

作文技術の教育に関する文章が、正確でわかりやすい文章になっていないとすれば、恥ずかしい話である。推敲はしたがそれが十分と断言できるほど時間を使うことができない時点で、投稿してしまったことについては申し訳ないと思っている。ご容赦願いたい。恥をかかないために投稿をやめるより、恥をかいても問題提起をすることが大学のためと思っての投稿である。

[参考にした本]

本多勝一：日本語の作文技術、朝日文庫、1982.
清水幾太郎：論文の書き方、岩波新書、1959.
木下是雄：理科系の作文技術、中公新書 1981.